様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６７２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４１３

研究課題名（和文）イギリス・ロマン主義文学におけるペルー表象

研究課題名（英文）The Representation of Peru in English Romantic Literature

研究代表者
市川　純（ICHIKAWA, Jun）

日本体育大学・体育学部・准教授

研究者番号：７０５０７９７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：この研究では、主にドイツの劇作家アウグスト・フォン・コツェブーの悲劇『ペルーのスペイン人』の英訳、翻案、ヘレン・マライア・ウィリアムズの長詩『ペルー』を取り上げ、イギリス・ロマン主義文学におけるペルー表象を考察した。当時のペルー表象の社会的背景を考察することで、イギリスにおけるフランス革命やナポレオンの脅威、奴隷制反対運動といった、歴史的・政治的問題がここに含まれることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
イギリス・ロマン主義文学におけるペルー表象の意義についてはこれまであまり研究されてこなかったが、コツェブーやウィリアムズの作品研究を行うことによって、英文学の枠に留まらない、イギリスとドイツ・スペイン・フランス・ペルーを巡る世界史的問題を提起することができた。フランス革命やアンチ・カトリシズム、奴隷制廃止運動といったロマン主義文学における諸問題が、ペルー表象には濃密に凝縮されていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study takes up mainly English translations and an adaptation of Die Spanier in Peru oder Rollas Tod by a German play writer August von Kotzebue and an epic-like poem Peru by Helen Maria Williams, and examines the representation of Peru in the English Romantic literature. Considering the social background of the literary representation of Peru at that time, this study reveals that it includes historical and political issues in England such as the threat of the French Revolution and Napoleon, and Abolitionism.

研究分野：英文学

キーワード：ロマン主義　コツェブー　ウィリアムズ　ペルー　フランス革命　奴隷制反対運動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）申請者はイギリス・ロマン主義文学を専門とし、特にメアリ・シェリー（Mary Shelley）を中心に研究し、彼女を主要なロマン派詩人と比較して、ロマン主義文学におけるどのような位置づけが可能なのかについて考察、博士論文を完成させた。その中で着目するようになったのが、ワーズワスの（William Wordsworth）『抒情民謡集』（*Lyrical Ballads*, 1798）第２版（1800）の序文における“German Tragedies”への激しい攻撃である。この「ドイツの悲劇」とは、具体的には当時の大衆に非常に人気のあったドイツの劇作家アウグスト・フォン・コツェブー（August von Kotzebue）による悲劇の翻訳を指すのだが、コツェブーの悲劇作品が実際にどのようなものなのか論じられる機会は極めて少ない。しかし、当時のイギリスにおけるドイツ文学の受容に関する研究から浮かび上がるのは、喜劇・悲劇を含めたコツェブーの作品の中でもスペインの将軍ピサロ（Francisco Pizzaro）の暴虐とそれに抗する純朴なペルー人との戦いを描く『ペルーのスペイン人』(*Die Spanier in Peru*, 1795)が翻訳、翻案され、シェイクスピア以上の上演回数を誇るほどの人気を博していた事実である。

ドイツの作家が描いたスペインとペルー人の物語を英訳して受容したイギリスには複雑なナショナリズムの問題が存在する。対岸のフランス革命を考えればカトリック世界への反発や偏見、さらにスペインとはアルマダの海戦以来の因縁がある。対してドイツ文学はゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）やシラー（Johann Christoph Friedrich Schiller）をコールリッジ（Samuel Taylor Coleridge）らが評価して翻訳もしていたが、同時に大衆向けの恐怖小説(Schauerroman）の英訳が人気を博していた。ゴシック小説隆盛の当時、ワーズワスはこれらとコツェブーを同列に並べて批判している。

この二人のロマン主義詩人の文学観とコツェブーの悲劇の問題について、申請者はロマン主義時代におけるドイツの恐怖小説やゴシック小説に対するロマン派詩人の批判的な文学観とコツェブーの作品との関係を中心に研究をしていたが、その中でペルーの原住民の表象に関する複雑な問題を考察する必要性も感じた。特に、インカ帝国に対するスペインの政策に批判的な宣教師ラス・カサス（Las-Casas）や、現地人女性と結婚するスペイン人アロンソ（Alonzo）など、悪漢として描かれるピサロと対立するスペイン人も登場する問題がある。

ペルーに関してさらに考察すべき文学作品があることもその後の研究の中で痛感した。ロマン主義文学においてしばしば言及される感受性（sensibility）に関する論文を読んでいたところ、フランス革命の理念に賛同したリベラルな女性詩人、ヘレン・マライア・ウィリアムズの『ペルー』（*Peru*, 1786）への言及を見つけ、コツェブーの作品と関連させて研究する問題が多々含まれているのではないか、また、ペルーの表象を研究することは当時の感受性文化を考察するための重要な手がかりともなるのではないか、と着想した。

２．研究の目的

コツェブーの悲劇『ペルーのスペイン人』とウィリアムズの『ペルー』、これらイギリス・ロマン主義時代の文学作品を、当時のイギリスの文化人から見たペルーへの過剰な理想化というポストコロニアル的な視点も踏まえつつ、そこにこの時代のカトリック国家への複雑な感情や、奴隷制度、感受性に関する議論を繋げることで、コツェブーやウィリアムズの作品分析のみに留まらない、幅広くロマン主義文学を見直す視点を生み出すことを目的とした。

３．研究の方法

研究期間は３年間を計画し、初年度にコツェブーの『ペルーのスペイン人』を中心に、２年目にはウィリアムズの『ペルー』を、それぞれがどのような状況下において執筆、受容されたのかを一次資料を駆使して実証的に、作品の解読のみならず、歴史・社会的背景を当時の定期刊行物に見られる言説とも照合して研究した。

３年目には上に述べたラス・カサスや、対して南米の植民地戦争を擁護したスペインのユマニスト、セプールベダ（Juan Ginés de Sepúlveda）によるインカ帝国征服に関する議論を整理し、その上でコツェブーとウィリアムズの作品の検証結果をイギリス・ロマン主義文学の重要概念である感受性や奴隷制度の点から分析。最終的に上述のサイードによる『オリエンタリズム』を代表とする現代のポストコロニアリズムの視点も踏まえた新たな見解を打ち出すこととした。

４．研究成果

（１）初年度のコツェブー作品の研究成果は2018年３月16日、アメリカ、フロリダで行われたThe 39th International Conference on the Fantastic in the Artsにおいて“‘Pizarro’ as a Gothic Villain”の題で口頭発表し、後に日本語に直して大幅に加筆・修正を加えたものを「ゴシックの悪漢としての「ピサロ」――『ペルーのスペイン人』の歴史的背景」として、『日本体育大学紀要』第48巻第１号（2018年９月）pp. 25-37に発表した。その概要を以下に記す。

本研究はワーズワスが『抒情民謡集』の序文でゴシック・ロマンスとドイツの悲劇という二つのジャンルを並列して批判しているところに必然性を見出すものであり、そこからコツェブーの『ペルーのスペイン人』が重要な歴史的課題を提示するものであることを明らかにした。コツェブーにはこの作品以外にも当時人気を獲得した劇作品があるが、とりわけ当時の人気が高く、広く注目を浴びていた悲劇『ペルーのスペイン人』に注目して議論を進めた。最初に、この作品をゴシック研究において指摘されている特徴の一つである「悪漢ヒーロー」（hero-villain）の

観点から分析し、両者とも人を魅了するヒーローとしての側面を持ちながら、無慈悲で残酷な面を持つという、共通の特徴を提示した。さらに、この「悪漢ヒーロー」の登場する作品のテーマが当時の歴史的、社会的問題への意識と密接につながっている点についても論を進め、『ペルーのスペイン人』が爆発的人気を引き起こした必然性を明らかにした。当時のイギリスにとって最も脅威に感じられた国は革命の起こっていたフランスであり、さらにはナポレオンのイメージがこの劇には投影されていたと考えられるのである。また、イギリス国内では反奴隷制運動が高まっていた時代でもあり、スペインがペルーを侵略したことへの反発と重なる部分も多い。これらの議論を踏まえ、この作品がイギリスとスペイン、さらにはフランスとの関係、そしてヨーロッパによる植民地政策や反奴隷制運動といった政治的、また歴史的に重要な考察課題を含んでいる点について論じた。

（２）研究計画２年目のヘレン・マライア・ウィリアムズの『ペルー』に関する研究成果は、2018年10月21日に兵庫県立大学姫路環境人間キャンパスで行われたイギリス・ロマン派学会第44回全国大会での口頭発表、「女性化されるペルー――ウィリアムズの『ペルー』とコツェブーの『ペルーのスペイン人』」で行い、後に加筆・修正した「ペルーヴィア――ヘレン・マライア・ウィリアムズの『ペルー』における女性化されたペルー」を同学会の紀要『イギリス・ロマン派研究』第43号（2019年3月）pp. 1-15にて発表した。以下、その概要を記す。

ヘレン・マライア・ウィリアムズは1784年に叙事詩風の長詩『ペルー』を出版する。この詩でペルーの魅力的な自然風景を描きつつ、同時に16世紀スペインの征服者たちによるペルーの無残な運命も描いている。ロマン主義時代の文学作品におけるペルーの重要性は充分に議論されていないが、当時はペルーに関していくつかの重要な文学作品が出版されており、それらが文学的潮流に重要な役割を果たしていた。ウィリアムズもまたペルーの歴史的問題を主題に取り上げ、ペルーの無垢なる人々を虐げたスペインの征服者たちを批判している。先行研究においては、『ペルー』に見られるウィリアムズのリベラルな政治姿勢やそれと関連したジェンダー的問題が議論されてきた。本研究はそれらの議論に基づいたうえで、スペイン人征服者たちと被征服者のペルー人の間の対立を、ジェンダー的問題と関連させて議論した。

ウィリアムズはペルーをペルーヴィアという女性として擬人化している。慣用的に国家を女性に擬人化しているだけでなく、ペルーヴィアは女性自身としての肉体や感情を露にしている。また、スペインのドミニコ会司祭ラス・カサスはペルー人を保護し、残酷な征服を行ったスペイン人を非難した人物として知られているが、彼もまた『ペルー』の中で女性の擬人化と関連付けられており、女性的な感傷的性格が提示されている。犠牲者として描かれるペルーヴィアとその守護者ラス・カサスはさらにもう一つの女性として擬人化された「感受性」とも結びつく。これらは共通の政治的立場で繋がり、巨大な政治的力を形成して、スペイン人征服者とその暴虐な男性的イメージと対立していることを明らかにした。

（３）研究計画３年目では、イギリスで行われた国際学会 The Forty-Eighth Wordsworth Summer Conference において、2019年8月13日に口頭発表 “Ethics of Describing Indigenous People in Helen Maria Williams’ *Peru*” を行った。発表内容の概要は以下の通りとなる。

（２）にも示したが、ウィリアムズは暴虐なスペイン人征服者という男性的原理を批判するために、被征服者のペルー人やその擁護をするラス・カサス、そしてラス・カサスの性格造形に如実な強い感受性、これらを女性的な原理としてまとめ上げて対立構造を作り上げている。ただ、このように図式化したジェンダー構造には問題も含まれる。征服者と被征服者の対立はあまりにも単純化されて書かれているのだ。それだけではなく、歴史的事実の改変も含まれている。男性的イメージを伴った征服者たちの横暴な植民地主義の不正を強調するために、ウィリアムズは時として歴史的事実を取捨選択、あるいは無視し、犠牲者としての女性的イメージを対立的に描いているのだ。『ペルー』は歴史的主題を扱い、政治的問題についての議論を促すものでありながら、その歴史的記述はウィリアムズが取捨選択し、さらには歪めたイメージに基づくものなのである。この詩におけるウィリアムズの政治的・歴史的見解を解釈する上で、歴史的事実の改変は倫理的な問題を孕むものである。

本研究では『ペルー』の中からいくつか歴史的事実として疑わしい事例を取り上げ、ウィリアムズが依拠した歴史書の記述と照合し、どのような改変が行われているのかを検証した。そして、歴史的事実でないことを『ペルー』のような歴史的主題を扱う文学ジャンルで描くことの意味について議論した。これは文学において歴史を描くことの倫理について検証することでもある。

（４）これらの研究成果の他にも、関連した研究テーマで、いわば副産物ともいえる論考を執筆している。「『マンク』における二つのプロットと世界史的背景」（論文集『怪奇と幻想の英文学IV』、春風社、2020年8月刊行予定に収録の予定）である。

ゴシック小説『マンク』（*The Monk*, 1796）の作者として知られているマシュー・グレゴリー・ルイス（Matthew Gregory Lewis）は、上述のコツェブーの作品の英訳にも携わっており、『ペルーのスペイン人』の翻訳もある。そのルイスがスペインを舞台にした『マンク』を執筆したことには、世界史的にみてどのような意味があるのかを考察した。ゴシック小説の特徴としてアンチ・カトリシズムがしばしば挙げられるが、カトリック国家の中でも特にスペインを舞台にすることはどのような意味があるのかについて、コツェブーやウィリアムズ作品の考察を踏まえて

検証した。そこで明らかになったのは、『マンク』はイギリスにおける伝統的な反スペイン的感情、特に南米に行った残虐な征服戦争のイメージを引きずるものであることがわかる。さらには、18 世紀後半の奴隷制反対運動の高まりにおいて、南米の現地住民に働いたスペインの残酷な所業が共に批判されているという構図もある。これを浮かび上がらせるかのように、プロテスタントのドイツを舞台にした挿話が挟まれており、ルイスはドイツを経由することで対照的にカトリック国家スペインの問題を明るみに出している。『マンク』におけるスペインの修道院の権威者に対する批判的な表現の背景には以上の問題が含まれていることを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 市川純	４．巻 48-1
２．論文標題 ゴシックの悪漢としての「ピサロ」――『ペルーのスペイン人』の歴史的背景	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本体育大学紀要	６．最初と最後の頁 25～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 市川 純	４．巻 43
２．論文標題 ペルーヴィア―ヘレン・マライア・ウィリアムズの『ペルー』における女性化されたペルー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	６．最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.18986/eer.43.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 市川純
２．発表標題 女性化されるペルー――ウィリアムズの『ペルー』とコツェブーの『ペルーのスペイン人』
３．学会等名 イギリス・ロマン派学会第44回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Jun ICHIKAWA
２．発表標題 "Pizarro" as a Gothic Villain
３．学会等名 The International Conference on the Fantastic in the Arts（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Jun ICHIKAWA
２．発表標題 Ethics of Describing Indigenous People in Helen Maria Williams’Peru
３．学会等名 The Forty-Eighth Wordsworth Summer Conference
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 市川純	４．発行年 2020年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 22（予定）
３．書名 『マンク』における二つのプロットと世界史的背景（『幻想と怪奇の英文学IV』収録予定）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考